

# 第11章 リミタリアニズムのための自尊心論証

著者: Christian Neuhäuser

リミタリアニズムは、少なくとも特定の条件下において、正義が富の制限を要求するという見解である。その原初の形態において、この見解はIngrid Robeynsによって発展され、二つの議論——民主主義的議論と満たされない緊急ニーズからの議論——を用いて規範的に正当化された(Robeyns 2017; 2022)。民主主義的議論は、富の特定の集中が政治的平等の公正な価値を損なうと述べる。非常に裕福な、特に極めて富裕な人々は、不釣り合いな、時には支配的な政治的権力を持つ。正義は、富が政治的平等を損なわない点まで富の制限を要求する。満たされない緊急ニーズの議論は、特定の閾値以上の富は、裕福な人々の繁栄に対して何も、あるいは少なくとも重要なものは何も寄与しないと述べる。この理由により、この閾値以上の金銭は、他者の緊急ニーズを満たすためにはるかに有効に使用でき、これは合理的に正義の要求として概念化できる。したがって正義は、この閾値以上の富の再分配を要求する。効率性の考慮により、閾値以上のすべての金銭に課税するのではなく、大部分にのみ課税する方が良いかもしれない。経済学者はしばしば70パーセントを効率的な上限/最高限界税率と判断する(Hamlin 2018)。

本章では、Robeynsによって発展された二つの議論とは異なる、リミタリアニズムのための新しい議論を提供することによって、リミタリアニズムの正当化に貢献したい。この議論は、基本的善としての\*\*自尊心(self-respect)\*\*に基づいている(Rawls 2001; Eyal 2005; Stark 2012)。この議論によれば、リミタリアニズムは、社会のすべてのメンバーが自己価値感を発展させ、個人的プロジェクトを追求できるように、自尊心の社会的基盤を保護するために必要である。この種の自尊心は、特定の閾値以上の富よりも重要な基本的善であるため、もしそれが自尊心の社会的基盤を確保するために必要であることが判明すれば、リミタリアニズムは、正義の原理として、あるいは正義の原理の直接的な政策的含意として正当化できる。

この自尊心論証は、民主主義的議論および満たされない緊急ニーズの議論と両立可能である。同時に、それは独立して成立する。民主主義的議論と満たされない緊急ニーズの議論が失敗したとしても、自尊心論証はリミタリアニズムの正当化のための堅固な基礎を提供できる(Volacu/Dumitru 2019; Timmer 2019; Huseby 2022)。

本章では、リミタリアン的正義原理のための自尊心論証を五つのセクションで展開する。第一セクションでは、Rawlsによって発展された自尊心の概念を議論する。私は、Cynthia Stark(2012)によって提供された自尊心のロールズ的概念の最良の解釈によってさえも、その概念はまだ不完全であると論じる。自尊心のロールズ的概念はあまりに心理学的であり、自尊心の社会的尊重への依存の規範的構造を問題的な方法で無視している。このため、Rawlsは、経済的平等、より正確には制限された経済的不平等が自尊心の社会的基盤として持つ機能を見落としている。

自尊心の古典的ロールズ的概念へのこの批判は、リミタリアニズムのための自尊心に基づく議論の基礎を築く。第二セクションでは、この議論の簡潔な非形式的概観を示す。残りの三つのセクションでは、議論の最も重要な要素を議論する。第三セクションでは、自尊心が平等な立場の市民としての地位に規範的な方法で依存するという主張を擁護する。第四セクションでは、差異原理が自尊心の社会的基盤としての平等な立場を確保するのに不適切であると論じる。これは第五セクションにおける、この理由により差異原理はリミタリアン的原理によって補完されるべきだという主張につながる。

本章は、議論の簡潔な要約とリミタリアン的原理に関する寛容的見解の展望で終わる。

## 1. 基本的善としての自尊心とその平等な尊重への依存

John Rawlsは有名にも、自尊心が基本的善の一つであり、おそらく最も重要なものかもしれないと言っている。彼は自尊心に、時に見落とされることもあるが、彼の正義論において中心的な位置を与えている。そしてRawlsは自尊心の重要性について極めて明確である。彼は基本的善についてこう書いている(2001, p. 59):

自尊心の社会的基盤は、市民が人間としての自己の価値の生き生きとした感覚を持ち、自信を持って自己の目的を前進させることができるために通常不可欠な社会制度のあり方として理解される。

Rawlsは、自尊心が自己評価(self-esteem)に必要であり、それが順に個人的プロジェクトを追求する能力に必要であり、それが順に人生に意味を与えるために必要であると考えている。要するに、ロールズ的枠組みにおいて、自尊心は意味のある人生の必要条件である。これはまた明らかに、Rawlsが様々な場所で、彼の正義原理が自尊心のための十分な社会的基盤を提供すると述べることが非常に重要な理由である。

もちろん、自由主義的正義論は、自由主義的信念によれば個人は自己の人生に意味を与えることにおいて自律的であるべきであるため、異なる目的のための手段を提供することを通じてのみ間接的に人生の意味に貢献できるというのは真実である。しかし、自由主義的正義論は依然として、人々がそうすることを可能にする社会的基盤を提供する必要がある。もしそれを提供しないならば、それは人々にとって最も重要なことという点で人々を失望させる。

それでは問い合わせるには、正義の原理が正確にどのように自尊心の社会的基盤を確保するかである。私の理解では、執筆時点における自尊心のロールズ的説明の最良の解釈は、Cynthia Stark(2012)によって提供されている。彼女は、自尊心が道徳的価値を持つからといってそれが基本的善であると仮定するのは誤りであると論じている。代わりに、Rawlsは自尊心が本質的価値も持ち、正義の原理がこの本質的価値を確保するために必要であると主張していると読むのが最良である。

Starkは、自尊心が個人的状況と政治的状況の両方に依存すると論じることによって彼女の論点を主張する。この仮定に基づいて、彼女は、市民が確実な自尊心を持つためには、自己の社会的貢献を価値あるものとして見ることができる必要があると主張する。

この価値ある貢献は三つの方法で理解できる:

- 1. 功績的解釈:** 貢献は自尊心のために特に功績があると見なされなければならない。貢献がより価値があるほど、誰かが自己を尊重する理由がより多くなる。
- 2. 本質的善解釈:** 貢献は貢献者自身にとって本質的に善でなければならない。特定の方法で社会に貢献することは、直接的な方法で貢献者の人生をより良くする必要がある。
- 3. 社会的重要性解釈:** 貢献は単に社会的に重要でなければならない。それは社会に利益をもたらす何かでなければならないが、特に能力主義的な方法である必要はない。

Starkは、第一の解釈はロールズ的理論の平等主義的観点と両立不可能であると論じる。なぜなら、それは社会的貢献の仮定された価値に基づく尊重と自尊心の階層を作り出すからである。真の問題は第二と第三の解釈の間にある。

Starkは、第三の解釈のみがRawlsの理論によって支持されると論じる。なぜなら、ここでのみ、自尊心の政治理論に必要な政治的状況と自尊心の間の結びつきが確立されるからである。第二の解釈の問題は、もし自尊心の価値が単に人にとて本質的に善である何かと見なされるならば、相互尊重の政治的義務、差異原理、自由の優先性は自尊心にとって必要とされないことである。これらの政治的

原理なしに、人々が自己の個人的人生プロジェクトを自由に追求できる基本構造を達成することは可能である。

しかし、もし自尊心が自己の社会的貢献が社会的に重要であるという事実に依存するならば、それらの原理は決定的になる。それらの原理が適所にある時にのみ、市民は自己の貢献が社会によって価値あるものと見なされ、この方法で重要であるという確実な感覚を持つことができる。これが真実であるのは、後で論じるように、それらの原理が、人々が社会的に重要な貢献をする市民として行動でき、そのように見なされることを確保することを意図しているからである。

Starkは彼女の解釈によって、文献で何度も向けられてきたロールズ的立場に対する深刻な反論を論駁することに成功している(Thomas 1978; Eyal 2005; Doppelt 2009)。この反論の支持者たちは、自尊心を第二の解釈に沿って理解し、したがって個人的人生プロジェクトを追求するための道具的価値のみを持つものとして理解する。これは自尊心を正義の原理から問題的な方法で切り離す。なぜなら、ロールズ的用語で蔓延する不正義と見なされなければならないものに対して、自尊心を心理学的に免疫にすることは考えられるからである。この仮定に基づいて、批評家たちは、自尊心という基本的善に基づく特定のロールズ的正義原理のための議論は欠陥があると論じる。なぜなら、自尊心という道具的善は他の方法で確保できるからである。もしこれが真実ならば、自尊心という基本的善はロールズ的正義原理によって適切に確保されず、それらは適宜修正されなければならないだろう。

しかし、もしStarkが、Rawlsにとって自尊心は本質的価値を持ち、それが社会的に価値ある貢献に依存するということについて正しいならば、この反論は健全ではない。自尊心が本質的価値を持つという意味で、それは市民の善き生の個人的概念に結びついているだけでなく、社会的に価値ある貢献に直接付随しているため、正義の原理はこの付随を確保するために必要である。私は、Starkのロールズ解釈は、彼の理論が明らかに有害な方法で矛盾していないことを示すことに成功しているため、文献で提供されている他のものより優れていると考える。

同時に、Starkの解釈は、リミタリアニズムを考察する際に重要な、Rawlsの自尊心理学に関する他の二つの問題を明らかにする。第一の問題は、Starkの読解によってさえも、Rawlsの理論は依然としてあまりに心理学的であるということである。第二の、そして本章にとって決定的な問題は、彼女の解釈によれば、政治的平等を必要と見なすが経済的不平等を自尊心にとって問題がないと見なすことは、やや恣意的に見えるということである。

## ロールズ的自尊心概念の二つの問題

### 第一の問題:過度に心理学的

Rawlsは最初の問題——自尊心の理解が過度に心理学的であること——を作り出すつもりはなかったかもしれない。Starkが指摘するように、彼は自尊心を本質的価値を持ち、個人的状況のみではなく政治的状況に依存するものと見ている。社会の基本構造の制度によって適切に尊重されない誰かは、これが個人的プロジェクトを追求する心理学的能力を害するかどうかに関係なく、自己の自尊心が侵害されていると見なす理由を持つ。

しかし、Starkの解釈によってさえも、自尊心の本質的価値は、自己が追求する個人的プロジェクトの客観的価値への確実な信念の基礎として理解されている。この信念は、Starkの読解では、それらのプロジェクトの少なくともいくつかの貢献が社会的に重要であることを伝達する社会によって確保される。正義の原理とそれから派生した制度は、自己の貢献の社会的価値へのこの信念を確保するために必要である。

### 私の批判:順序が逆

私は、自尊心、正義の原理、社会的に価値ある貢献の間のこの関係の理解は逆だと考える。人々の自尊心が社会的に価値ある貢献に心理学的に依存しているから、彼らが正義の原理の形で尊重に値するのではない。代わりに、人々はまず、重要である社会の平等なメンバーとして尊重に値する。このた

め、正義の原理の任務の一部は、彼らに社会的に価値ある貢献に従事する機会を提供することである。

もし人が社会とその制度によって尊重されないならば、彼らの不満は、心理学的に自己のプロジェクトの社会的価値をもはや経験できないということであってはならない。彼らは、社会が彼らを不当に扱っているという事実を非常によく認識しているかもしれないが、それでも自己が重要であり、自己が提供しなければならないものも重要であるという信念において確実であるかもしれない。彼らの不満は、社会が彼らまたは彼らの「自己」を、言ってみれば、そうすべき方法で尊重しないということである。彼らの自尊心に与えられる、彼らに否定的影響を及ぼす害の種類は、規範的であり、主として心理学的ではない。

したがって、ここで擁護される自尊心の改善されたロールズ的理解は、人は、自己を、そのように尊重される権利を持つ他のメンバーと平等な立場を持つ社会のメンバーとして見る場合、自己を尊重するというものである。

## 第二の問題:政治的平等 vs 経済的不平等の非対称性

第二の問題は、自尊心の規範的理解が確立されると出現し、それはリミタリアニズムの原理がロールズ的正義論においてなぜ必要とされるかもしれないかという問いと密接に関連している。Rawlsによれば、平等な政治的権利の公正な価値を含む平等な基本的権利を選択する一つの理由は、市民が自己を社会の貢献するメンバーとして尊重されていると見るためにそれらが必要であるという事実である(1971, p. 441)。

彼らが政治的に平等な市民と見なされる時にのみ、彼らは基本構造の制度によって尊重されているという信念を持つ十分な理由を持つだろう。もしこの立場が説得的であるならば——そして本章の目的のため私はそうであると仮定する——さらなる考察がすぐに現れる。経済制度は基本構造の一部であるため、経済的平等も市民が自己を社会の平等なメンバーとして尊重されていると見るために必要であると論じられる可能性がある。したがって、これらの制度は強い経済的平等を確保するよう設計されるべきである。

しかし、これはRawlsが採る立場ではない。彼は代わりに差異原理を支持し、それは間違なく、少なくとも原理的には相当な、しかし無限ではない経済的不平等を許す経済的インセンティブ構造を許容する(Reiff 2012)。なぜRawlsが、自尊心の社会的基盤としての尊重を確保するために経済的平等が不必要であると信じるのかは、それほど明確ではない。おそらくそれは、政治的平等と公正な機会の平等が、経済的不平等のレベルがあまりに高くないことを確保すると彼が信じているからであるが、これは自明には程遠い。

この不確実性は、差異原理単独が自尊心の社会的基盤を保護するのに適しているかどうかについての議論を開く。もし差異原理が比較的高いレベルの経済的不平等と両立可能であり、もしこれが自尊心を脅かすならば、それはリミタリアン的原理によって置き換えられるか、あるいはおそらく補完される必要がある。そのようなリミタリアン的原理の目的は、自尊心の社会的基盤が脅かされないことを確保するために必要なレベルに経済的不平等を制限することであろう。

差異原理をリミタリアン的原理で補完する必要性を避ける一つの有望な方法は、差異原理が所得と富の基本財だけでなく、自尊心とも直接関係していると論じることであろう。このように理解されるならば、差異原理によって許容される所得と富の差異は、自尊心の社会的基盤が脅かされないことを意味する程度にすでに制限されている。この場合、リミタリアン的原理はすでに差異原理に組み込まれているだろう。

第五セクションで、私は差異原理の正しい解釈が何であるかはあまり重要ではないと論じる。自尊心の改善された規範的理解に基づくロールズ的立場が、リミタリアン的正義原理と、可能な所得と富の

蓄積の最高レベルを直接制限する政策を受け入れなければならないことを確立すれば十分である。本章の次のセクションで提示される議論は、その結果を達成することを意図している。

---

## 2. 尊重、経済的不平等、差異原理

前セクションで言及したように、Rawlsによれば、政治的不平等は平等な尊重と両立不可能であるが、経済的不平等はそれと両立可能であるように見える。政治的制度だけでなく経済的制度も社会の基本構造の一部であるため、政治的領域と経済的領域のこの異なる評価は説明を必要とする。政治的領域における平等の必要性と経済的領域におけるその欠如を説明するのに十分強い、市民の政治的地位と経済的地位の間の相当な差異が存在しなければならない。

さらに、そして最も重要なことに、ロールズ的立場が維持されるためには、政治的ケースに存在する理由から独立した、平等な尊重の要件として経済的平等を根拠づける他の理由が存在しないということもまた真でなければならない。

政治的平等が要求される理由で経済的ケースには存在しないものが実際にあり、それは国家の拘束力ある意思決定と力の独占に関係している。しかし、この差異から、経済的平等、あるいは少なくとも不平等の制限が要求されないということは導かれない。これは、この要件のための独立した理由が存在するからであり、それは自尊心という基本財に基づいている。

政治的領域と経済的領域の間には依然として差異が残る。なぜなら、独立した理由は、厳格な平等ではなく制限された不平等という、より弱い要件につながるからである。私はこのセクションでこれらの主張を三つのステップで議論する。なぜなら、それらは次のセクションで発展させるリミタリアン的原理のための議論の背景を提供するからである。

### 議論の三つのステップ

#### 第一ステップ: 政治的ケースの特殊性

議論の第一ステップは、経済的ケースには存在しない、政治的ケースにおいて厳格な平等を要求する一つの明確な理由があることを認めることである。この理由は単純に、国家が最高の権力の代理人であるということである。なぜなら、社会の基本的ルールは政治的過程で拘束力あるものにされ、国家はそれらのルールへの遵守を強制するために力の独占を付与されるからである(McMahon 1994)。

市民がそれらのルールに対して平等な発言権を持つ時にのみ、彼らは自己を社会の平等なメンバーと見なす理由を持つ。他者よりも少ない発言権を持つことは、明らかに直接的に低いランクを持つことを構成する。なぜなら、人はそれらの他者によって政治的に支配され、彼らの政治的意志に従属させられるからである。これが、私が推測するに、Rawlsが平等な参加の権利に公正な価値が与えられることを要求し、それが単なる形式的権利ではないことを要求する理由である(Krishnamurthy 2013; Edmundson 2020)。

#### 第二ステップ: 経済的領域の違い

同じ支配の構造は経済的ケースには存在しない。なぜなら、間違いなく、力の独占によって裏打ちされた類似の規模の拘束力ある決定は存在しないからである。代わりに、少なくとも比較的理想的な状況において、経済的行為者は、特定の会社で働くかないと特定の製品をもはや買わないといった、相当なコストなしに特定の制度的取り決めから退出するオプションを持つ。

しかし、それらの比較的理想的な状況下でさえも、ほとんどの市民はおそらく完全に働くのをやめることはできないし、誰もが少なくともいくつかの財を買わなければならない。しかし、改善された退出オプションと、政治的意見決定過程を通じて経済的構造と制度を統治する法的ルールを継続的に変

更する可能性は、職場における支配を、それが政治的支配とは非常に異なるものになる程度にまで減少させる。

### 第三ステップ:独立した理由——自尊心

しかし、これは経済的不平等の制限が不要であることを意味しない。なぜなら、自尊心という基本財に基づく独立した理由が存在するからである。政治的領域と経済的領域の間には依然として差異が残る。なぜなら、この独立した理由は、厳格な平等ではなく制限された不平等という、より弱い要件につながるからである。

自尊心に基づく理由は、市民が平等な立場の社会のメンバーとして尊重される必要性から来る。経済的不平等があまりに大きくなると、それは平等な社会的立場を損ない、したがって自尊心の社会的基盤を損なう。これは二つの主要な経路を通じて生じる:

- 1. 社会的実践へのアクセス:** 極端な経済的不平等は、市民が通常の社会的実践(外食、休暇、文化活動など)に参加する能力を不平等にする。これらの実践への参加能力は、平等な社会的立場の表現である。
- 2. 地位財へのアクセス:** 特定の財(高級車、高級時計など)は社会的地位を象徴的に表現する。極端な経済的不平等は、地位階層を作り出し、平等な立場を損なう。

---

## 3. 平等な立場の市民としての地位

前セクションで確立されたように、自尊心は市民としての平等な立場に規範的に依存する。本セクションでは、この主張をさらに擁護し、明確化する。

### 平等な立場とは何か

平等な立場の市民としての地位とは、単に平等な基本的権利を持つこと以上のものを含意する。Rawls(2001, p. 60)が述べるように、それはまた、政治的権利の公正な価値の実現、公正な機会の平等、差異原理を要求する。

正義の原理は、すべての人が、社会に社会的に価値ある貢献をする社会のメンバーとして自己を尊重できることを確保するよう設計されている。前述したように、私はこの解釈に同意し、それは自尊心が平等な立場を持つ社会のメンバーとして尊重されることに依存する理由を説明する。市民は、社会に価値ある貢献をする社会のメンバーとして見られる権利という意味で、平等な立場への権利を持つ。

### 異議への応答

**異議1:** 「すべての社会のメンバーが実際に価値ある貢献をするわけではない」

**応答:** 標準的異議(幼い子供や障害者を除外する)に反して、ロールズ的枠組みは、すべてのメンバーが価値ある貢献をすることを可能にする基本構造を要求すると解釈できる。さらに、この理解によれば、貢献は経済的協力に還元されない。重度の障害を持つ人々でさえ、彼らの人格によって他の人々を幸せにするだけで、様々な価値ある貢献ができる。

**異議2:** 「貢献は平等に価値があるわけではないため、平等な尊重に値しない」

**応答:** 貢献の価値はランク付けされるべきではない。なぜなら、それは基本的尊重と協力的企業としての社会の理念を損なう地位階層を導入するからである。代わりに、Ian Carter(2011)が別の文脈で呼んだ「不透明尊重(opacity respect)」が社会のメンバーに付与されるべきである。不透明尊重は、人々が行う貢献の種類における特定の差異にもかかわらず、同じレベルの尊重に値することを意味する。

さらに、協力的貢献は常に才能と社会的前提条件にも依存するため、ロールズ的枠組みによれば道徳的に重要なのは貢献努力であり、その効果ではない。異なる才能と個人的性質が協力的企業により多くまたはより少なく貢献できる異なる正しい社会を考えることが可能である。この柔軟性を考えると、特定の社会構造の選択は常にある程度恣意的であり、それは業績を常に運にも依存し、決して功績のみには依存しないものにする(Neuhäuser 2021)。

---

## 4. 差異原理と平等な立場

基本的自由は、自尊心の社会的基盤としての平等な立場を保護するために明らかに重要である。同じ基本的自由を持つことは、平等な立場を直接表現する。同様に、公正な機会の平等は平等な立場のために明らかに重要である。すべての人が特定の職業や役割で働く公正な機会を持つ時にのみ、それらの地位は平等な立場と両立可能である。

しかし、**差異原理については同じことが真ではない**。少なくとも理論的には、もしそれが経済的に最悪困窮の社会メンバーの経済的福祉を最大化することにつながるならば、比較的高いレベルの経済的不平等を許容するように見える。

しかし、もし社会の平等なメンバーとしての人の立場が自尊心の社会的基盤であることが真ならば、市民の経済的福祉を最大化することが最悪困窮層自身が選択するもの、したがって原初状態で選択されるものであることは明らかではない。純粋に経済的用語で代替シナリオBにおいて社会の最も不利なメンバーの経済的状況が状況Aよりもわずかに悪いとしても、彼らは経済的不平等がより低いこの状況Aを依然として好むかもしれない。

この選択の理由は、厳格な経済的平等への根拠のない選好や、水準低下異議(levelling-down objections)につながる可能性のある何らかの嫉妬であってはならない(Gustafsson 2020)。この立場の理由は代わりに、自尊心の社会的基盤としての平等な社会的立場の独立した価値かもしれない。

### 二つの議論

平等な立場が制限された経済的不平等に依存すると信じる理由として、少なくとも二つの議論ができる:

#### 第一の議論:社会的実践への参加

市民が平等な立場を持つためには、基本的権利と公正な機会の平等だけでは不十分である。彼らはまた、特定の社会で生活する人々の通常の活動と見なされる社会的実践に参加できる必要がある。これらは、外食、休暇、博物館・映画・フェスティバルへの訪問、スポーツ活動や他の趣味、子供のための学校活動や職場からの外出への貢献、生涯教育への従事など、あらゆる種類の実践である。

しかし、少なくとも市場ベースの社会において、これらの活動、特に定期的にそれらに参加することは、相当な額の金銭を要すると仮定するのは合理的である。人々がこれらの種類の活動に完全に参加できることが重要であることが正しいならば、彼らはそうするための必要な経済的資源へのアクセスを持つ必要がある。

ここで、これは富や経済的不平等そのものに関連する問題ではないと異議を唱えられるかもしれない。代わりに、それは貧困に関連する問題である。なぜなら、人々は十分な経済的資源を持たないために重要な社会的実践に参加することを妨げられてはならないからである。言い換えれば、最低所得は中央値所得からあまり離れてはいるべきではない。

しかし、この異議は重要な社会的実践の関係的経済的性格を過小評価している(Hirsch 1977)。例えば、もし社会の最も裕福な20パーセントが残りよりもはるかに多くの金銭を持つならば、彼らは他の誰も余裕がない社会的実践を作り出し、従事することができる。彼らはまた、意図的または非意図

的に、これらの実践を特に尊重に値するものとして提示するために自己の社会的権力を使用できる。このようにして、貧しい人々だけでなく、所得が中央値所得以上であるが富裕層に属さない30パーセントの人々の平等な立場さえも脅かされる地位社会が作り出される。

経済的不平等が地位を付与する実践を通じて平等な立場を脅かさないことを確保するために、下限閾値だけでなく上限閾値も必要である。

## 第二の議論:地位財へのアクセス

第二の議論は第一の議論に類似している。違いは、この場合、人々が経済的アクセスを持たなければならぬのは重要な社会的実践ではなく、直接的に地位財であるということである。特定の財は、社会的地位を象徴的に表現する価値という特定の使用価値を持つ。哲学博士の称号を持つことは、とりわけ、教育の特定の社会的価値と、一部の人々の心では知性、おそらく知恵さえも表現する(または表現しようとする)(非経済的な、願わくば)財である(Halliday 2016)。同様に、ロレックスの時計やポルシェの車は、富裕であること(の価値)を表現する経済的財である。

---

## 5. リミタリアン的原理の正当化

差異原理は、自尊心の社会的基盤としての平等な立場を単独で確保するには不十分である可能性がある。しかし、これはリミタリアン的原理が追加される必要があることを意味するのか、それとも差異原理がすでにリミタリアン的要素を含むように解釈されるべきなのか?

この問い合わせへの私の答えは、どちらの解釈も許容可能であるということである。重要なのは、**自尊心の規範的理解に基づくロールズ的立場がリミタリアン的原理を受け入れなければならない**ということである。

### 二つの可能な統合方法

#### 方法1:差異原理の再解釈

差異原理を、所得と富だけでなく自尊心とも直接関係していると理解することができる。このように理解されるならば、差異原理によって許容される所得と富の差異は、自尊心の社会的基盤が脅かされない程度にすでに制限されている。この場合、リミタリアン的原理はすでに差異原理に組み込まれている。

#### 方法2:明示的リミタリアン的原理の追加

あるいは、差異原理を補完する別個のリミタリアン的原理を追加することができる。この原理は、可能な所得と富の蓄積の最高レベルを直接制限する。

### どちらでもよい理由

実際には、どちらの方法が採用されるかは重要ではない。なぜなら:

1. 実質的結果は同じ: どちらのアプローチも、極端な経済的不平等の制限につながる
2. 哲学的基礎は同じ: どちらも自尊心という基本財の保護に基づいている
3. 政策的含意は同じ: 累進課税、富裕税、資本再分配などの政策が正当化される

重要なのは、**ロールズ的正義論が、自尊心を保護するために経済的不平等に上限を設ける必要がある**ということである。

---

## 6. 結論

本章の目的は、リミタリアン的正義原理がロールズ的枠組み内で考察に値することを示すことであった。私は、不平等を制限することは、社会のすべてのメンバーの平等な市民としての地位を確保するための要件として理解できると論じた。この平等な地位は、順に、協力する社会のメンバーとしての彼らの役割における人々の自尊心のための社会的基盤として理解できる。

正しい社会は、すべての人が価値ある貢献をすることができる可能性を確保しなければならず、貢献するメンバーとして平等なランクであるという社会のすべてのメンバーの権利を承認しなければならない。このランクは、すべての市民に平等な地位を付与することによって確保され、それは順に、地位競争と階層を防ぎ、すべての市民が地位を表現する社会的活動に参加できるようにするために、不平等を制限することを要求する。

### 自尊心論証の追加的役割

この自尊心に基づくリミタリアニズムの議論は、福祉、持続可能性、(共和主義的)民主的参加の考慮に基づく他のリミタリアニズムの議論を補完するものとして理解できる。同時に、それは追加的役割を果たすと私は考える。

もしRawlsが、自尊心が人々が自己を社会の貢献するメンバーと見なすための重要な可能化条件であることについて正しいならば、自尊心を確保することは、十中八九、正義の原理への遵守を高めるだろう。この高い遵守は、順に、国家が緊急ニーズを満たし、持続可能性に向けて働き、実質的民主主義構造を確立することをより容易にするだろう。

言い換えれば、リミタリアン的原理を実装することは、社会をより正しくするために使用できる重要なツールと見なすことができる。

## あなたのSoE研究への含意

この章の自尊心論証は、あなたのSoE理論の哲学的基盤として決定的に重要です:

### 1. 概念的並行性

Neuhäuser (経済的正義)	山内 (福祉的正義)
基本財: 自尊心	基本財: 自己肯定感
社会的基盤: 平等な立場の市民	社会的基盤: 対等な支援関係
脅威: 極端な経済的不平等	脅威: 極端な権力の非対称性
解決策: リミタリアン的閾値	解決策: Constitutional AI
目的: 意味のある人生の可能化	目的: 自律的人生の可能化

### 2. 規範的構造の共通性

Neuhäuserの中心的洞察:

自尊心は、人が平等な立場の社会のメンバーとして尊重される時に確保される。極端な不平等はこの立場を損ない、したがって自尊心を損なう。

あなたの中心的洞察:

自己肯定感は、利用者が対等な立場の支援関係のメンバーとして尊重される時に確保される。極端な権力の非対称性はこの立場を損ない、したがって自己肯定感を損なう。

### 3. 実装メカニズムの並行性

#### Neuhäuserの提案:

- 累進課税
- 富裕税
- 資本再分配
- 地位財へのアクセス制限

#### あなたの提案:

- Constitutional AI (権力制限)
- データ主権 (情報的権力の再分配)
- NOCCによる権力の可視化
- 透明性による地位階層の解体

### 4. 「不透明尊重(Opacity Respect)」の革新性

Neuhäuserの「不透明尊重」概念は、あなたのSoE理論に直接適用可能:

#### 障害者支援における不透明尊重:

- すべての利用者は、貢献の「種類」や「程度」に関係なく平等な尊重に値する
- 支援者は利用者の「能力」をランク付けするのではなく、彼らの「努力」を尊重する
- 重度障害者も「人格による他者への貢献」など、固有の価値ある貢献をする

これは、あなたが批判してきた「自己決定能力の前提としての能力評価」という問題への哲学的解答です。

---

© 2023 Christian Neuhäuser, CC BY-NC-ND 4.0

<https://doi.org/10.11647/OPB.0338.11>